

H821.51

PER

B

モーラばあさんの超能力



A. ペルビク・作 田中かな子・訳

E. ワリテル・絵

大日本図書

モーラばあさんの超能力

ちょうのうりょく

アイノ・ペルピク作 田中かな子訳 エドガル・ワリテル絵



子どもの本——大日本図書

とおいとおい大海原に、ちいさなちいさな島がひつそりとそそりたつて
いた。島のまわりは先のとがった岩場や暗礁にかこまれていた。岩と岩
のあいだには、あわだつ波がおしよせていた。その島には、くねくねと枝
をひろげた古い松がおいしげり、根もとににはコケモモがいっぱい、ひな
たには、とげのあるハマナスの花がさきみだれていた。

岸辺の岩には、海鳥が巣をつくっていた。

島には、鳥たちのほかに、ただひとりババモーラという海のおんばが
すんでいた。

ババモーラは、ぎすぎすしたのっぽのおんばで、頭は、まるでカラス
の巣みたいにくしゃくしゃだった。おんばは、ずっとむかしからこの島で
くらしてきた。ハマナスやコケモモの実をたべて、いきてきた。たまに気
がむけば、岸辺で小魚をとつた。秋になれば、キノコ狩りをたのしんだ。

島のまんなかには、ひときわがつしりした松の木がはえていた。強くて

くましい根つこは土と石にしがみつき、長い枝は、風でまがりくねつてい
た。その松の枝のわかれ目にババモーラの住家があつた。

この住家が風で海にふきとばされないように、家の三つの角には大きな
丸石がしばりつけられ、四つめの角には、ふしぎな符号がいっぱいの、古
い古いイカリがつりさがつていた。それでも、ものすごい秋のあらしは、
ときにはおんばの家を空中にもちあげてしまうこともあつたが、このイカ
リと大きな丸石のおかげで、ういていた家は、ようやくもとの場所におさ
まるのだった。ひさしの下には、薬用の草のたばや糸でつないだキノコ、
たばねたコケや木のこぶがかわかすためにつるしてあつた。家そのものは、
松の枝にかくされた大きな鳥の巣みたいだった。そのかわり、家のなかは
きれいで、いごこちがよかつた。窓には、海の波色のカーテンがかかり、
床には、海のしぶきのようにやわらかな白いカーペットがしいてある。棚
や戸棚は、あらしで岸にうちあげられた、ありとあらゆるめずらしい品物

でいっぱいだ。あるものは、ちんばつした船で、むかしかわれていたもの、あるものは、暗い海の底からうかびあがってきたものだ。

でも、バカリモーラの家で、いちばんだいじな道具は、大きなかまどだった。寒さが、まわりをこおらせてしまうころになると、かまどには、松ぼっくりがここちよくはぜるのだ。このかまどに銅の釜をかけて、バカリモーラは、魔法の薬草をせんじていた。というのは、バカリモーラは魔女だつた。おんばは、独特のせんじ薬ととくいのまじないで、どんな病もなやみも、たちどころになおしてしまつた。そのうえ、病やなやみをよそへやることさえできたのだ。そういうことから、バカリモーラという変な名まえがついた。海のおんばはそのきみょうなおこないとふるまいから、魔女にされたが、みかけも、妖怪じみたおそろしいかつこうをしていた。

バカリモーラは、陸地の森や野原や、沼地や沢地で、むかしからつたわつた体によいといわれる薬草をつんでいた。おんばが海をわたるのは、で

つかい黄色の気球(ききゅう)だつた。気球が空たかくとべば、まるで満月(まんづ)とみちがえられた。おんばは、暗い夜、ちょうど本ものの月がのほるころ、とぶのがすきだつた。こんな晩ならだれにも気づかれずにすむからなのだ。おんばは、やたらに人目について、なんどもふゆかいなめにあつてきたので、人目につきたくなかったのだ。

ある夜のこと、バカリモーラは、まつ暗になつて森からかえることになつた。草の根つこやつぼみやさやや茎(くの)が、いっぱいにつまつた手かごとふくろの重さで、おんばは、体を弓なりにおりまげ、死にものぐいで気球(ききゅう)にしがみついていた。

そのとき大あらしがやつてきた。雨はどしゃぶりになつた。バカリモーラはぬれぬずみ。

むかい風はバネをはじいたように、おんばのからだをまげたりのばした



り、にもつといつしょに岸辺につくまで、小枝のようにもあそぶのだった。ババモーラは、うれしさのあまり鼻うたまでうたいだした。ババモーラは、大風とたわむれるのがだいすきだった。あらしがはじまるといつだつて気分がよくなつて、うたいたくなるのだ。おんばの声は、けたたましかつた。きいきい声をはりあげて、いつだつていちばん陽氣でそうぞうしい歌をうたつていた。

ババモーラは、今夜も、風にむかつてうたいだした。おんばの声はだんだん大きくなり、あらしの歌を、声をかぎりにうたいまくつた。そして、しまいには、岩と岩のあいだをびょんびょんおどりだすしまつ。

ババモーラはうちょうてんになつて、気球をもつとふくらませてみた。風は、おんばの手から気球ききゅうをもぎとつて、あれくるう闇うののなかへほうりだそうとするのだが、ババモーラのほうも、死にものぐるいで気球ききゅうにしがみつき、雨雲の下を自分のかことふくろをしっかりかかえて、とびまわつまつていた。

ていた。

海の上が、あれくるつてきた！ 空からは滝たきのように雨がふり、波は、ババモーラにとどけとばかり、たかくかぶさつてくる。風は気球ききゅうを、あつちへこつちへとゆりうごかした。ババモーラは、すんでのところで、しぶきのたつ波間なみまに、何回も、ほうりだされそうになつた。でも、おんばは、気球ききゅうを両手両足でつかとかかえて、自分の好きなテンポのはやい歌を大声でうたいまくつた。気球の飛行ひこうは、おんばをうちょうてんにしてしまつていた。

すぐに、鳥がみえてきた。だのに風におおわれた気球ききゅうは、まるで糸のきれただこのように前へ前へとにげていく。

「あわれなモーラよ。まさか、あのだいじなおうちへ、もどれなくなるんじゃないだろうね？」

魔女まじょのおんばはなきだした。

おんばは、気球のかじとりにつかうなわを、つぎつぎとひっぱってみた。でも、もうすっとまえに、風がなわをよじり、からませてしまっていた。気球は、かじのとれない風船となってしまったのだ。あらしは鳥をとおりこしてひろい海へとはこんでゆく。

ババモーラはやけくそになつて、つめをたて、気球をひつかきだした。耳をつんざく音がして、気球がはじけたとおもうと、おんばはだいじな宝物といつしょに、おちていつた。おんばは岩の上におち、かごやふくろはその上に、やぶれた気球がその上におちた。おんばは、とんがつた岩にあたつて、ちょっとのあいだ、氣をうしなつていた。

われにかえると、おんばはまつさきに、うつた手足をかぞえ、さすつてみた。どうやら、みんなそろつているようだ。

「うまいぐあいに、安着陸というところね。」

ババモーラはほつとして、だいじな宝物をひろいあつめにかかつた。

あらしは、今までどおり、いきおいよくあれくるつている。波は、うなり声をあげ、岸辺の丸石にくだけちる。難破した船の板きれや木つばが、ごみといつしょになつて、水の中でくるくるとうずをまいている。

「船が、暗礁あんじょうにのりあげたんだわ、とうとうやつた！ こんなことになるんじゃないかとしんぱいしてたのに！」

ババモーラは、あたりをみまわしながらさけんだ。

ババモーラは、あれくるう波間ににはいつて、上から下へとうきしづみする船の破片はへんをかきわけかきわけ、なにかをさがしあじめた。波はおそろしい力でおんばをするといい岩場へたたきつけようとしていたが、ババモーラは、そんなことには、とんと気づいていなかつた。おんばにとつて、それどころではなかつたのだ。

とつぜん、雲のきれめからカモメがとんできて、なきさけび、ババモーラの肩かたにつめをたてた。

「さあさあ、わたしのカモメちゃん、なにをそんなにおこつているの？」

おんばは、カモメにやさしくいった。

つばさをうちふりながら、カモメはババモーラの肩かたにとまる、おんばはカモメをなでてやるのだった。

「わたしや、とてもしんぱいしてたんだよ。おまえ、どこへいつてたのさ？」

おんばがきいた。

カモメが、けたたましくさけんで、こたえる。ババモーラは、カモメを肩かたに、一步一歩と、海の中にはいつていった。水は、もうおんばの胸むねまできて、波は、たえず頭かしらごしにおおいかぶさつてくる。ババモーラの髪かみは、海草やごみがいっぱいへばりついて、くしゃくしゃになつた。それでも、おんばのさがしているものは、まだみつからないのだ。

「もうみつかつてもよさそうなのに。」

おんばがつぶやいた。

海は、前よりいつそう深くなつてきた。ババモーラは、しまいにおよぎだした。カモメはまいあがり、おんばのすぐ上をとびまわっている。

「さがしておくれよ、カモメちゃん。」

おんばは、カモメにいつた。それでも、カモメはけたたましくないては、あらしをついて、はばたくばかり。

ちよつとはなれた岩のあいだでは、波が大きな音をたてては、水煙みずけむすをまきあげくだけちる。ババモーラは、そつちへおよいでいくと、満身まんじんの力をこめて、つるつるの大岩へあがろうとした。おんばは、何回も波にさらわれそうになりながら、とうとう、岩の上によじのぼり、全身ぜんじんをのばしてたつた。ぬれたスカートが風で両足にまといつき、しぶきで目がかすんでいた。ババモーラは、手をかざして、まわりをみまわしてみた。

すると、水の中に、金色の肩章かんじょうのついた青いラシャ服たれがちらちらして

いるではないか。いなずまのようなはやわざで、ババモーラは水の中にとびこむがはやいか、ラシャ服に長いごつごつした手をのばしていた。

「さあさ、わたしのだいじなお人！」

おんばは、自分のほうにひきよせた。

ババモーラがみつけたのは、肩章のついたラシャ服をきた、どうやら難破船の日やけした水夫らしかった。おんばは、水夫の髪をつかむと、岸辺をさしておよぎだした。あらしとたたかいながら、全身の力をこめて、ゆっくりゆっくりおいでゆく。カモメは、ふたりの上を、高く低くとびまわっている。やっと岸辺にたどりつくと、ババモーラは、砂の上へ水夫をひきすりあげた。そのあと、まるでにもつみたいにおんばの家までひきずつていき、大いそぎでかまどに火をたきつけた。

水夫のようすは、ひどかった。かまどのそばのマットの上にぶつたおれた水夫は、もえさかる炎にてらされて、身も心もすっかりうちのめされ

ているのがわかつた。頭がうちわられ、顔はほくほくよりも白かつた。

ババモーラは、大いそぎで薬草のたばから茎や花をとりだすと、釜の中になげいれた。水は、ごぼごぼ音をたててわきだした。ぶつぶつなにかをとなえながら、ババモーラはせんじ薬をかきませた。ちょっと味をみてから顔にしわをよせると、火の中へパッとはきだした。炎がじゅつと音をたて、緑色にそまつた。そのあと、おんばはジョッキに熱いのみものをついで、けが人の口へながしこんだ。

それから、魔法の薬草酒をそつと舌にぬつてやると、けが人は、その場で、びくつとびあがつた。

「いつたい、なにするんだ！」

水夫は床の上にとびおきて、大声でさけんだ。水夫は、すぐに難破船のことをおもいだすと、また床にたおれた。そして、まわりをみまわし、もえさかるかまどの火のそばに、しゃがみこんでいるババモーラをみつけ

た。肩かたといわす、みだれ髪がみといわす、海草がぶらさがつている。服からも水がほたぼたれている。かまどの火は、いよいよ縁にもえさかる。

「どうやら地獄じごくにおちたらしいな。もしも、記憶きおくがちがつてなければ、おいら、しずんでしまつたはずなのに？」

水夫みずしやくはこわごわたずねてみた。

「そのとおりだよ、おぼれていたのさ。だけどね、あたしが、いきかえらせたのさ。だのに、あたしの家を地獄じごくとおっしゃるのかね！」

パパモーラがいやみをいった。

水夫みずしやくは、ばつが悪くなり、いいわけをはじめた。

「船からこんなとおい岸辺に波ではこばれるなんて、とてもしんじられなかつたもん。おいら、ちゃんとおぼえているんでさあ。船は、海のどまん中の暗礁えいじょうにのりあげてしづんじまつたんだ。なかまちは、はしけにたすけられたんだが、おいら、船べりで波にさらわれちまつて。」

「わかってる、わかってる。だから、あんたをさがしにでかけたんだから。あたしや、このまえの金曜日にあんたをこの岩場でみつけたんだよ。」

おんばがいった。

「このまえの金曜日きんようびだって？ このまえの金曜日には、おいらアムステルダムにいたんだよ。どんなにしたって、おいらをみつけるなんて、できっこないじやないか。」

水夫みずしやくは、びっくりしてしまつた。

「ええつ、できっこないですって？」

おんばがヒヒヒとわらいだすと、水夫みずしやくは、ぞくぞくととりはだがたつた。

「じや、いつてくださいよ。おいら、今、どこにいるんです？」

水夫みずしやくは、おそろしさをせいいっぱいこらえて、きいたのだった。

「あなたの船がしずんだところから、そうね、半マイル（一マイルは約一・六キロメートル）かな。あたしの島のうえよ。」

おんばがこたえる。

「そんなこと、ないでしょ。この近くにはどんな島もないはずだ。カモメが巣をつくるしかのうのない、ちっぽけな島でさえもね。おいら、これでも、航海学校をいくつもでて、あらゆる海洋をまわってきただ。おいらにだって、わかつちりますぜ！　このあたりには、たいがい、どんな島もないことぐらい。」

水夫は、大声でさけんだ。

「それよそれ。遠い海のことについちゃなんでもしつているくせに、自分のすぐそばでおこつたことなんて、なにもしらないんだからねえ。あんたのひいひいじいさんもまだうまれてないころには、この島のことはだれだつて、しつていて内しょにしていたものさ。あわれな遭難者たちは、ここをみつけては、たすかってきただから。」

おんばが、口をはさんだ。

おこつたバリモーラは、水夫のほうに背をむけて、仕事にかかっていた。

水夫はおきあがろうとしてみたが、手も足も、まったくいうことをきかないのだ。

「おいら、いつたい、どうなつちまつたんだよ？」

水夫がおどろいて、さけんだ。

「あんたの船は、沈没しちまつただよ。ほら、おまえさんは、それでひどいめにあつたんさ。あんたの骨という骨はみんなおれて、肝臓もひ臓も、やられちまっている。」

おんばがいった。

「頭がいたいよ。」

水夫が、なきことをいいだした。

「ああ、頭がいたいだつて！　あたりまえよ。なにしろ頭じゅう、きずの

ないところがないくらいだものね！」

おんばはつけたした。

「せめて、お医者をよんでおくれよう！」

水夫が、たのみだした。

「あたしの島じや、お医者はあたしなのさ。」

ババモーラがいった。

おんばは、水夫をベッドによこたえると、水薬をのませにかかった。

「おんばさ、おれた骨にも副木をあてがわないんですかい？」

水夫がきく。

「そうだわね、あたしゃね、骨折なんて、ただの水薬だけでなおすのよ。」

おんばは、きつぱりといった。

水夫はがっくりしたが、でも、もうこれ以上さからうまいときめた。水

夫は、つとめてかくそうとしてはいたものの、ババモーラがこわかつたのだ。だが、ババモーラは、はやくも水夫のかんがえをみとおしていた。おんばは、カモメのみだれた羽毛をやさしくつくろいながら、はなしかけるのだった。

「それにしても、やつぱり、人間で、おかしなものだよ。なに」とも、習慣どおりにしなければ、まちがっているとか、悪いとか、なんでもすぐにつけてしまうんだからねえ、手におえないよ。」

カモメは、もともと、ただの小鳥でしかないから、なんにもこたえはしなかった。

翌日になると、水夫は、すこしよくなつた気がした。ババモーラが、一日三回の水薬をのませていくと、水夫はだんだんに回復していった。水夫が、ベッドから起きあがり、部屋をあるきまわれる日がきた。水夫

は鏡の前にたつて、自分のすがたをじつとながめだした。

「あーあ、やられたつ！ 今じゃ、おいらの髪半分が黒くなつちまつたよう！」

頭をむしりながら、水夫すいふがさけんだ。

バーモーラがちかづいて、注意ぶかく水夫すいふをながめた。

「そなつよ、よくあることさ。いくら氣をつけていたつて、なに」とにも、失敗しほはつきものさ。もし、おのぞみなら、髪せんたいをまつ黒にそめてしまつてもいいんだよ。」

おんばがいった。

「もとどおりの、明るい色にはならないのかなあ？」

水夫すいふがきいた。バーモーラは、肩かたをすぼめてみせた。

「そうね、あんたがそうしたいなら、明るい色にすればいいよ。ただね、あたしのいうこともよくおきき。あんたにはね、黒い髪かみのほうが、ずっと

よくにあうんだよ。」

それでも、水夫すいふは、なにがなんでも、もとどおりの髪かみになりたいと、ねがつた。

バーモーラは、釜かまいっぱいの水をはこんでくるようにいいつけると、それをにたてた。それから、戸棚とだなからながいことかけてさがしだしてきただにやら白い粉こなを、ぶつぶつ呪文じゆもんをとなえながら、釜かまの中にひとにぎりなげられた。その汁じるが、ちょっとひえたら、それで頭をあらえばよいとおしゃれた。

水夫すいふは頭をあらうと、鏡のほうへふっとんでいった。髪かみは、もとどおりの色になつていた。でも、水夫の頭は、まるで光の冠かんむりをかぶつたようにならざらしていく、やつぱりむかしどおりというわけにはいかない。「神さまっ！ おたすけを！ まさか、おいらの頭、神さまの光輪こうりんみたいに、これからずつと光るつてわけじゃないだろうな？」



水夫はさけびだした。

ババモーラは、本気でおこつた。

「なにもかも、おもいどおりじゃないというのね！ むかしの人はね、神さまの光輪をいただくためには、どれだけのことをしなければならなかつたことか！」

「こんなきみようなすがたして、おいら、どこへいけるってんだい？ 友だちにわらわれちまうぜ。」

「しううがないわね。岸辺へでていって、砂の中ですらしてごらん。そうすりや、光はとれるだろうからね。」

おんばは、いった。

水夫は、大きいそぎで家からとびだすと、岸辺へかけだした。両手にいっぱい砂をすくうと、こんどは、皮ふがひりひりするほど、ごしごし頭をこすつた。水夫は家にかえって、鏡をみた。光輪は、ほとんどうすれてい

た。こんなことをだれにもしられず、だれにも気づかれずすんだことに、
水夫はひと安心した。

「死ぬほどの傷からたちなおれたのが、ただの水薬のおかげだなんて、
これが、もしもおいらにおこつたことでなかつたら、とてもしんじられない
かつたなあ。お医者だつたら、めんどうな手術じゅじゅつを七つ以上はやつたにち
がいないもの。」

水夫はいった。

「そういうもののなさ。自分の目でみたことでも、しんじようとしない人
もいるんだからねえ。だいたい、あんたの傷だつて、とくにひどくはなか
つたじやないの。手だつて、足だつて、肝臓かんぞうだつて心臓じんぞうだつて、みんな体
についていたんだからねえ。もしもよ、そのひとつでもかけていたら、こ
んなことじや、すまされなかつたろうからねえ。」

おんばは、はきだすようにいった。

水夫は、はやくかえりたくてたまらなかつた。

「おいらを、ボートでつれてつてくださいよ！ 家の者もしんばいしてま
すでなあ。」

水夫は、たのんでみた。

けれど、おんばは、ここにはボートが一隻せきもないと、こたえるのだった。
「じや、おんばさ、いつたい、陸地りくちまでなににのつていくだね？ おんば
さ、いつたい、ここでどうやってくらしているだね？ 世間せけんのあらゆるも
のからとおざかってさあ。」

水夫は、びっくりしてきいた。

「ばかな質問しつもんをおしでないよ。あたしの家は、ここにあるじゃないか。あ
たしや、自分の家からはなれては、無事むじには生きちゃいけないだろうから
ねえ。」

おんばがどなつた。

「おんばさ、たまには自動車ではしつてみたくはないのかよ？じゃなきや、カラーテレビをみたいともおもわんのかね？」

水夫みずぶが、きいてみた。

「そんなもの、しらないね。いずれにしても、あたしや、今まで、そんな気分になれなかつただけさ。」

「つまり、これから、いつまで、おいらをここへおいとく気だね？ それとも、やつぱり、家へかえしてもらえるのかね？」

水夫みずぶは、がつかりしていた。

「どうなることやら。もしも、気球ききゅうがまだ役にたつならねえ。あんたを、すぐにも陸地りくちへもどしてあげられるものを！」

ババ＝モーラは、そういうと、すぐに針はりに糸をとおしはじめた。

気球ききゅうはぼろぼろになり、ぬれた砂さながくつづいて、まるまつていた。なわはもつれて、くつつきあい、本体もずたずただつた。

氣球ききゅうの修理じゅりには、かなりのこんきがいった。おんばは、がまんしきれずに、糸をとおした針はりを、なんかいも、ほおりだした。でも、水夫みずぶのほうは、なわをほどき、おんばをはげまし、はげまし、ふたたび針はりをもたせるのだった。とうとう、最後さいごのあなにつぎをあておわつた。いろんなあて布はをはりあわせた氣球ききゅうは、まるで、パチワークのふとんみたいだつた。

闇くろの夜をまつことになつた。

ババ＝モーラと水夫みずぶは、家の前のハマナスのしげみにすわつてまつた。お日さまはおだやかにかがやいて、ハマナスの花が、あまくにおつていた。「なあ、モーラおんばさ、あんた、どうしておいらをたすける気になつたんだい？ おしえてくれよ。」

水夫みずぶは、草の上にすわつてきいてみた。

「あんたをたすけられなかつたらね、あんたの死が、あたしのくるしみになつたろうし、あたしのなすべきことにも気づかなかつたろうよ。」

ようやく、影がながくなりだした。はやくも夕闇がこくなつて、風向きがかわってきた。夜になると、気球はおんばと水夫をのつけて、陸地へはこんでいった。

家へかえつてくると、ババモーラは、ひどい悪寒におそれた。せきこみ、鼻はつまり、のどがはれあがつた。腰はするどい刃ものでさすようにいたみだした。頭はくらくら、足はがくがく、体せんたいが火のようにあつかつた。

「あわれなモーラよ！ あのしけのときに、かぜにやられたんだね！」

おんばは病気になるのを、ひどくよろこんだ。

おんばは、大いそぎで、ベッドのしたくをはじめた。ずっとまえから、おんばはこんなときの用意がしてあつた。だから、あらいたてのシーツも、新しいふとんも、ふかふかの毛布も、ちゃんとあつたのだ。おんばは、ベ

ッドのとなりに、鼻かみ用の新しいハンカチひとやまと、体温計をふでたていっぱい用意した。おんばは、病氣になると、たえず熱をはかつていていた。だから、熱が高くなると体温計の目もりをさげるのがおしくなつた。そこで、そのつど新しい体温計ではかるのだ。病氣がなおると、四十度の目もりをさした体温計をだいじに小箱の中にしまいこみ、ときどき夜、お茶をのみながら、その体温計をほればれとながめて、よろこんでいた。

ババモーラは、病氣の一日めから薬をのむのはいやだった。ここには、どんな病も朝までには、あとかたもなくおしてしまうほどよくきく自家製の薬があつた。ハマナスの実をにだしで、ハチミツをいれた薬がベッドに用意してあつた。でも、それをいつきにのんでしまうと、病氣のなりゆきをさまたげるからと、それもまなかつた。お茶のポットもおかれ、病人に必要なものはすべてそろつた。

ババモーラは、寝床の中でおこになり、わきの下に体温計をつつこん



だ。熱は水銀柱のいちばん上をさして、これ以上あがりようがない。おんばは、きゅうに暑くなつたり、寒くなつたりした。

「あわれなモーラよ！ おまえさんの熱は、なんと高いことか！」

おんばは、うれしそうに悲鳴をあげた。

ババモーラはこきげんだった。すさまじいせきの発作が、おんばの体をゆざぶつてきた。

「あわれなモーラよ！ おまえさん、とうとうかぜにやられたらしいよ！」

おんばは、ためいきまじりのしわがれごえでいった。

せきをおもしろがっていたのだが、しまいには、せきをするのもつれた。とはいっても、こんな楽しみをなくしてしまいうのがおしかつた。でも、とうとうたえきれなくなつて、まだ一度もためしたことのない、薬草のせんじ薬をつくつてみることにした。ながいあいだ、研究したつくり方で、

ききめをためしてみることにしたのだ。おんばは、ペバーミントの花ぶさ、ハッカの芽、カノツメソウの根、カラスイチゴの茎、トウワタの花をまぜて、タチジャコウソウのひらくまえのつぼみをひとつかみくわえた。そのみものは、目からなみだがでるほど苦くて、からかつたが、そのかわり、せきはいつべんにとまつてしまつた。ハッカのせいでのいたみがなくなり、タチジャコウソウとカノツメソウはのどをいやし、トウワタは、ほんのわずかしかいれなかつたのに、ふしぶしのいたみがおさまつた。おんばは暑さのせいでぐつしょり汗をかいた。

ババモーラは毛布をはぐと、体温を調節するために、窓を大きくあけた。鼻かぜになつてしまえばいいんだわ！ すきま風は、鼻かぜをさらにひどくし、鼻からは、まるで春さきのしらかばの幹に樹液がしたたるように、鼻汁がぼたぼたとおち、ハンカチの山が、たちまちなくなつてゆく。せきが、おんばを苦しめるのをやめたら、こんどは、かわりに、ものすご

いくしゃみになやまされた。

「あーあ、あわれなモーラよ！ その鼻かぜが、おまえさんをよわらせるんだよ！」

こうふんして、いった。

おんばは、ハーケーションしては、力まかせに、チーンと鼻をかむため、鼻が赤くただれだした。そのとき、おんばは、このよこれた鼻かみ用のハンカチをあらわなければと、ふとおもいついたのだ。そこで、おんばは、苦しそうにため息をして、寝床からはいだすと、オグルマソウを粉にしたものを、ひとすくい鼻へすいこんだ。いうまでもなく、鼻かぜはピタリとやんだ。この粉のおかげで、たとえ涙こうとやらおうと、腰のいたみまでとまつてしまつたからふしきである。

そのかわりさいわいにも、熱はそのままだつた。ほんとうにおどろくほど高い熱だ。骨のふしぶしがきしきしたみ、悪寒がおそつてくる。バ

バモーラは、せめてうわごとだけでも、いわせてもらおうとおもつた。
「あわれなモーラよ！ おまえさん、ほんとうにそんなに悪いのかい？
うわごとまでいうのかい？」

おんばはつぶやいた。

だが今のところ、うわごとをいいたくても、なにもいえはしなかつた。頭だけは、異常にほつきりしていたのだから。おんばは、またもや寝床からはいだした。こんどは頭をもうろうとさせ、早くうわごとがはじまるよう、麦芽でつくったのみものを、びんからひとつくちのみほしてみた。でも、高熱のためにのみもののびんをまちがえたのか、それとも、のみものがぎやくにきいたのか、たちまち熱はぐんぐんさがりだし、骨のふしぶしのいたみもおさまつてしまつた。

「さあさ、モーラや！ おまえさん、どうやらもちなおしたようだよ。」

おんばは、ふきげんにいった。